

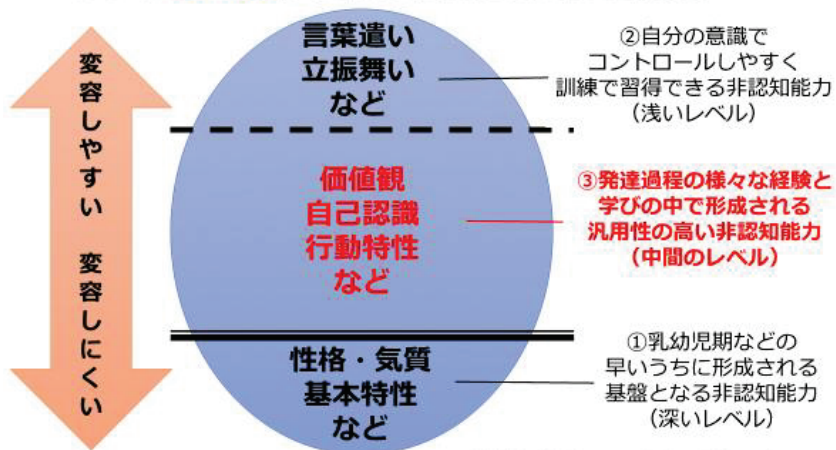
非認知能力の育成に向けて

「第3次岡山県教育振興基本計画」では、子どもたちの学びの原動力である夢を育む「夢育」を進め、意欲や自信などの「自分を高める力」を引き上げ、学力や体力、規範意識や「人間関係構築力」を身に付けさせることが重要とされています。この「自分を高める力」や「人間関係構築力」などは、「非認知能力」と呼ばれ、新学習指導要領で育成すべき資質・能力の一つである「学びに向かう力・人間性等」にも含まれており、現在注目されています。非認知能力の育成に向けて、下記の視点やポイントを参考に見てみてください。

非認知能力の3つのレベル

非認知能力を変容のしやすさで分けたものが右図です。①深いレベルは、個人が早い段階から持つ性格や気質、基本特性などです。②浅いレベルは、自分の意思でコントロールしやすい言葉遣いや立振舞いなどの表面的なスキルです。③中間レベルは、価値観や自己認識、行動特性などで、発達過程の様々な経験と学びの中で形成される、汎用性の高い非認知能力です。意識することで変え、伸ばすことができる力といわれています。

3つのレベルから見る非認知能力の段階



どうすれば伸びるのか

プロセスの中を見取るレンズが必要

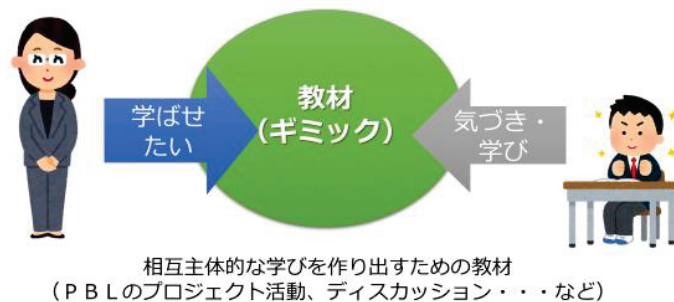
漠然とした「がんばった (がんばっている) ね」を噛み砕く
→プロセスの中を見取り、意識づけるための**レンズ**！



目標に向かうプロセスの中で、「自分を高めようとしているか？」等、3つの観点 (非認知能力レンズ) で、子どもの活動を見つめることがポイントとなります。

子どもたちの姿や、その変化をより意識的に見取り、その価値を認め、フィードバックし共有することが、非認知能力を伸ばしていくと考えられます。

学ばせたいことを直接教えずに教育活動へ**ギミック (仕掛け)**として仕込んでおく。
→主体的・対話的で深い学びの実現



教員は学校での様々な教育活動の中で、学ばせたいことを基に、子どもたちを引きつける教材を選び、適切なタイミングで用いていると思います。そうした意図的な仕掛け (ギミック) を選ぶ時の視点に、「非認知能力を伸ばすための視点」を加えることが大切です。

例えば、授業で使用する教材、学級活動や学校行事、教室や廊下の掲示物での意識付けもその一つです。

出典：中山芳一『学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす』東京書籍 (2018)

岡山県総合教育センターでは、岡山大学全学教育・学生支援機構 中山芳一准教授に監修いただき、**津山市立河辺小学校の実践**も紹介した非認知能力の育成についての動画を作成し公開しています。詳細はセンターホームページからアクセスできます。ぜひご利用ください。

